

## 異文化体験としての吃音—ナラティブ・アプローチと当事者研究—

九州大学留学生センター准教授（臨床心理士） 高松 里

スタタリング・ナウ 2012. 1. 22 №.209（日本吃音臨床研究会）より

## （1）はじめに

私は、九州大学留学生センターで、留学生を対象としたカウンセラーをしています。日本では珍しい仕事です。この仕事を始めたのが1989年でしたので、22年間続けていることになります。

その中で、「異文化とは一体何なのだろうか」という大問題をずっと考えてきました。みなさんは、「異文化」と聞くと、おそらく外国の、日本とは全く違った顔をした人々、考え方、文化や習慣といったものを思い浮かべるのではないかと思います。つまり、異文化は日本の外にある、と。

しかし、実際は違うのではないかと私は思います。

私たちは日常生活の中で、現実には多くの異文化に取り囲まれて暮らしています。普段は意識しないかもしれませんが、でも、ある日突然異文化が姿を現す、ということもあります。

例えば、昨年（2011年）3月11日の大震災はどうでしょうか？ それまでの「日常」が地震と津波によってすべてが塗り替えられてしまいました。家も、人も、人間関係も、仕事も、大事にしていた思い出も、すべて一瞬にして消えてしまいました。その時の経験は、「とても言葉にできない」「どう言ったらいいかわからない」「頭が真っ白になった」経験だったと思います。

その、「どう言ったらいいかわからない」状況こそ、「異文化」であると私は考えています。つまり異文化とは、定義するならば「それまで自分が持っていた言葉では、表現できない状況を指す」ということになります。

異文化とは「理解不能」という意味です。巷には「異文化理解」という言葉がありますが（私も時々使いますが）、実はこれは根本的に間違っています。異文化とは理解できないものであり、理解できたときにはすでに異文化ではなくなっています。どう言葉にして良いかわからない、どう表現していいかわからない、自分にもわからないから人にも伝えられない。そういうものが異文化です。

では、本題に入りますが、「吃音」を持つ、ということの一つの異文化体験であると考えられないでしょうか。あるとき、気がつくと、自分は「吃音者」となっていた。けれど、そのときにはおそらく何が起きたのか、全然わからない。いきなり、違う世界に突き落とされてしまう。なぜそのような話し方をするのかと友達も親も聞いてくるでしょう。しかし、それは「答えられない」のです。なにせ、異文化にいるのですから。言葉にできない、理解できない、説明できない。

私たちはそのような状況を生き延びていくために、自分なりに理解し言葉にし、他者に伝え、徐々に「異文化性」「異文化度」を小さくしていく努力が必要となります。

そのプロセスがどのようなものであるのか、本論では考えてみたいと思います。

（2）吃音を治そうとする人たち、  
吃音と生きようとする人たち

ところで、この文章は、日本吃音臨床研究会代表の伊藤伸二さんから依頼されました。伊藤さんとは、長いおつきあいになりました。それは、伊藤さんが吃音者のための「セルフヘルプ・グループ」を実践されているからです。私も、先ほど異文化が専門と書きましたが、もう一つの専門はセルフヘルプ・グループで、論文や本を何冊か書いています（高松、2004、2009）。

ところで、伊藤さんはずっと、吃音を治すことよりも、吃音を持ったまま生きることについて考えてきた人です。それは伊藤さん自身の経験に基づいています。伊藤さんは過去に、吃音あるいは吃音を持つ自分を否定し、吃音を治すことに全力をかけたことがありました。でも、今は違っています。治すことにこだわるよりも、その経験をどう語り、意味づけ、そこからどういう教訓を得ることができるのかを求めているように見えます。

しかし一方、世の中には、「吃音を治す」ということだけを推し進めている人たちもいます。彼ら

は吃音を治すとか改善するという点を強調した本を出版しています。最近読んだものとしては、小林宏明さんという方が書いた、『学齢期吃音の指導・支援』（小林、2009）という本があります。

この本は「ことばの教室や言語聴覚士の先生方を対象とした、学齢期の吃音の指導・支援の方法について解説したもの」（「まえがき」より）だとされています。内容的には、吃音を持った子どもたちに対してどのように指導するかが書かれているのですが、私は読んでみて、「え？これで終わりなの？」と思いました。この本にあるべき最後の章が抜けているのではないか、という強い違和感を持ちました。つまり、色々と指導もし、支援もしたけれど、なおかつ吃音が良くなる子どもに対して、どう対応するのが全く書かれていないのです。これでは、全員の吃音が改善してしまうように見えます。でも実際にはそんなことはないでしょう。

この本の巻末資料に「きつ音〇×クイズ」というものがあります。「Q12：きつ音がよくなるのは、努力が足りないからである」という問題があるのですが、その答えは「×」。これはいいでしょう。そこには「練習を続けてもきつ音が良くなるのは、決してあなたの努力がたりないからではありません」と書いてあります。しかし、すぐ後に、「練習した効果が出るには長い時間が必要なのです」（練習を）地道にやり続けていくことが必要になる」とあり、効果が出なくてもとにかく改善を目指すべきだと主張しています。要するに結果が出るまでは、永久に努力を続けるべきだと勧めているように見えます。こういう闇雲な努力をさせられる子ども達は気の毒だなあとしみじみと思います。

つまり伊藤さんが取り組んでいるような、「大丈夫だよ、吃音が治らなくたって幸せな人生も送れるんだよ」というようなメッセージは一つもありません。吃音は治すべきものであり、吃音を持ったままではまともな人生は送れませんよ、と暗に言っているようにさえ見えます。

その部分、つまり伊藤さんたちがずっと主張していること、最後の章にあるべきことが書かれていません。この本には、たくさんの引用文献、参考文献が紹介されているにもかかわらず、伊藤さんの論文や著作が一切ないのも、何だか変です。

「治らなかつたらどうしよう」「治らなかつたら人生は終わりだ」という恐怖感のために、「治らないかもしれない」ということは考えないようにしている、という感じです。

ところで、著者の小林さんご自身も、吃音者のようです。巻末の「著者紹介」には次のように書かれています。

「幼少の頃から吃音があり、高校から大学院時代の前半にかけては、上手く発話ができないことに悩む時期を過ごすが、その後吃音は徐々に軽快化する。現在でも、吃音症状が見られたり話しにくい語に悩んだりするものの、日常生活にはあまり支障がない状態となっている」。

つまり、小林さん自身も当事者であり、また悩んできた一人である、ということがわかります。

しかし、この本の中では、小林さん自身の経験は、全く語られていません。小林さんが「日常生活にはあまり支障がない状態」となるために、どのような練習を地道に続けてこられたのか、などについては全く触れられていません。

もちろん、専門書や研究書は、客観性が大事であり、著者の個人的な経験を語るべきではない、という見方もあるでしょう。しかし、我々は何かの本を読んで理解するとき、どういう著者がどういう立場から書いたものなのか、という情報は実はかなり重要なのです。例えば、「吃音なんて気にする必要はない」という発言があったとします。これは、当事者が言ったことなのか、全然関係のない人が言ったことなのかで、伝わる響きは全く違ってきます。前者だと「どういう経験をしたんだろう？」と考えるでしょうし、後者だと、「わかりもしないのに放っておいてくれ」という気分になるでしょう。

それに対して、伊藤さんは、ある意味、自分のことばかり書いています。『吃音ワークブック』（伊藤ら、2010）の本論は、「吃音を生きる伊藤伸二の人生」という文章から始まっています。伊藤さんは、徹底して「当事者であること」にこだわり、当事者の立場から発言をしようとしているように見えます。

なぜこのような事態が生じているのでしょうか。そして、どちらの本が「正しくて」「役に立つ」のか、私にはわかりません。そもそも私は吃音は専門外で、吃音は治るのか、治らないのか、本当のところわかりません。どうやら治る人もいます。しかしその理由はわからない。治らない人もいます。その理由もやはりわからない。そういう感じを持っています。

ただ、私にも、吃音を持つ人たちに対して、協力できることはあります。それは、「吃音という経験について語る」ということを支援することです。吃音が治ったならばその経験を語ればよい。治ら

ないのなら治らない経験を語れ。それが大事なことで、と私は思っています。

### (3) 異文化としての吃音 —言葉が溢れている領域と言葉の不毛地帯

前述したように、異文化の定義は、「それまで自分が持っていた言葉では、表現できない状況を指す」のだと考えています。つまり、何だか変だし、何かが起きているみたいだけど、それが何なのか、何と表現すれば良いかわからない状況です。不安定で地に足が着かない、何だか自分だけが取り残されているような、世界からこぼれ落ちてしまったような感覚、のことを指しています。

吃音を持った(持ってしまった)という経験は、一つの「異文化体験」なのだと考えられます。つまり、なぜ自分は普通の人のように流暢に話せないのか。その理由はわからない。誰も教えてくれない。そういう異文化状況の中でもがいている状況なのではないかと思えます。

ところで、世の中には、言葉が溢れている領域と、ひどく言葉の少ない領域があります。世の中のことは、どんなことでも言葉で表現できる、というのは間違いです。言語というのは、一種の記憶の集積装置みたいなもので、その時代や文化によって、言語化が徹底してなされている領域とひどく無視されている領域があるのです。

例えば、多様な言葉で溢れている領域の一つの例が、「恋愛」です。古今東西、恋愛に関する詩、音楽、小説、戯曲、ドラマ、指南書、結婚産業など、猛烈な蓄積量があります。つまりあらゆる状況に対応できるだけの言葉が用意されています。片想いをしようと、失恋をしようと、ハッピーになろうと、あらゆる勇気づけの言葉、慰めの言葉、具体的な方法論などが豊富にある。ところが、例えば同じ恋愛でも、「同性同士の恋愛」となると、その量はぐっと減ります。それでも、最近はおイズラブ・腐女子などの言葉もあり、それなりの盛り上がりも見せています。

それでは、「離婚」はどうでしょうか？ 離婚は何だか話題に上りにくい。ドラマティックではない。財産の分配だの子どもの養育権だの、全然心躍る要素がありません。だから、この領域についての言葉は、法律用語だとか、人生相談などが新聞に載る程度です。このように、世界の様々な事象については、言葉が溢れている領域と全くの不毛地帯があります。

では、本題である「吃音」はどうでしょうか？ 吃音が、人々の話題に出てくることはほとんどありません。また、吃音者がいる、ということも世間の人にはあまり認知していません。それは、多分、吃音を持つ人々の多くは、言葉の言い換えなどによって、あまり目立たないように努力しているからなのではないかと思えます。

ただ、時々、小説などに吃音が登場することがあります。例えば、村上春樹さんの「ノルウェーの森」では、大学時代の同室者が吃音者という設定になっていました(実在するモデルがいたようです)。大学生なのに朝早く起きて、寝ている主人公の横でどたどたとラジオ体操をするような少し変わった、朴訥な人として描かれていました。主人公がそのことを女友達に話すと、その場がなごむ、というようなエピソードでした。

また、石田衣良さんの「アキハバラ@ DEEP」では、主人公は吃音のフリーターです。彼は言葉を直接話さず、パソコンのキーを叩いて意志疎通を図ります。映画版では、子ども時代に吃音でいじめられた記憶が再現されるシーンがあります(ちなみに映画では成宮寛貴さんが主演。カッコイイ!)

残念ながら、私の知っている範囲で、吃音を身近に感じられる小説や映画はこのくらいのものだと思えます。

つまり、そもそも吃音についての情報も少なく、語られることもほとんどない。従って、その経験を言い表す言葉はあまりない。さらに、吃音が治るとか治らないとか、そういうことについては、語る言葉がさらに少ないというのが、現状だろうと思えます。

そもそもこの領域は、症状を表す言葉すらあいまいです。私が以前、セルフヘルプ・グループについての本の原稿を書いていた時、編集者から「“どもり”という言葉は差別用語ではないのか？使って良いのだろうか」という質問を受けました。「本人たちが了解しているのだから、いいんじゃないですか」と私は答えました。「吃音」という言葉よりは、「どもり」という言葉の方が世間には知られていると思えますが、これらの言葉が公に使えるものかどうか迷う、というのが現状なのです。

### (4) ナラティブ・アプローチ

さて、この「語る、語らない」ということに関しては、「ナラティブ(物語、物語る)」という考え方があり、最近ではよく話題に出てきます。私も

この考え方に会うことで、異文化に関する考え方も、自分自身の生き方も、随分変化しました。

「言葉が世界を作る」(野口、2002)。これがナラティブの基本的なテーマです。おもしろいですね。世界は言葉で出来ているわけです。もちろん、実際には言葉ではなくて、いろいろな物質で出来ているわけですが、私たちが認識できるのは、そこに言葉があるからです。言葉のないものは、意識のどこかに引っかかっても、それを認識し、理解し、伝えるということができません。言葉がなければ、それは「ない」も同然です。

我々が認識している世界は、言葉でできています。世界というものが客観的に先にあり、それに名前を付けるというわけではありません。言葉が生まれることにより、世界は我々の前に姿を現してくれる、とナラティブでは考えます。

また、ナラティブは、時間軸に沿って、物語が進行します。

例えば、伊藤さんたちの前述の本には、伊藤さんの半生が語られています。小学校2年生の時に学芸会の役をはずされたことから始まり、苦しい中高校時代を経て、民間矯正所での経験、その後の言友会設立への動き、吃音世界大会などが語られている。このナラティブで重要なのは、伊藤さんが「吃音」というものをどう経験し、そこから何を学んだのか、ということが時間とともに語られていることです。「吃音」という、できれば消し去りたいがそれもできない状況に対し、言葉を紡ぎ、たくさんの人と言葉を確認しあい、吃音を持つことの「意味」を共有するプロセスが描かれています。

吃音は、物理的にはただの喉の問題、あるいはそこを通過する空気の問題かもしれません。それ自体に何か元々の意味があるわけではない。だけど、吃音を持つことによって、自分の人生の色合いが変わる、そうであるなら、その経験から何かを学ばないわけにはいかない、ということなんでしょうと思います。

先ほど、私のもう一つの専門は「セルフヘルプ・グループ」であると書きました。セルフヘルプ・グループにおいて重要なのは、自分の経験をどのように語り、そこから何を学ぶことができるのか、という点です。これらのグループで扱っているテーマは、世間的に見れば、「ない方がよいもの」かもしれません。例えば、慢性病や身体・精神障害、死別や犯罪被害などというテーマを扱っています。

できれば、こういう経験はない方がいい。しかし、人は、人生の途中で予測もしなかったことに会うものです。もし、避けられない経験であるならば、その経験から何かを学び、それを言葉として他の人に伝えていくことが大事なのではないのか、と私は考えます。

ところで、私はある「ひきこもり者」のためのグループについて、スーパーバイズ(指導)を行っています。ひきこもり者が「治った」結果、何が起るのかを想像してみましょう。とりあえず働くでしょう。しかし、ある年齢以上になるとなかなか思うような仕事には就けず、結果的に単純労働をせざるを得なくなる可能性もあります。ようやく普通の世界に参入できた。でもそこで待っているのは、単に「普通の人と同じになった」というだけです。それでいいのでしょうか。ひきこもっていた何年間かの意味は一体何だったのでしょうか。その時期のことはもうなかったことにして、忘れてしまって、この社会の一員となればそれで万々歳なのでしょうか。

そうじゃないと私は思います。せっかく何年もひきこもったのだったら、そこから何らかの意味を見いださなくては、ひきこもった甲斐がないというものではないでしょうか。

意味を見だし、そこから自己についての物語を形成することが大事なわけです。

ナラティブでは「自己は物語の形式で存在する」とされています。

わたしたちは、ある事件をひとつの「物語」として理解できたとき、その事件を理解したと感じる。「物語」という形式は、現実のひとつのまとまりを与え、了解可能なものとしてくれる。「物語」は現実を組織化し、混沌とした世界に意味の一貫性を与えてくれるのである。逆に言えば、現実がよく理解できないというのは、適切な物語が見つからない状態だ、ということができる。物語は現実を組織化する作用をもっている。(野口、2002)

吃音を持つ人の中には、できれば吃音という問題を自分の人生から消してしまいたいと思っているのかもしれませんが。しかし、吃音はすでにその人の人生の中で重要な問題なのであり、その経験を無いことにして、人生の物語を構成することはできません。従って、自己物語を語るためには、吃音経験について、繰り返し繰り返し言語化を行い、他者と共有される必要があるということになります。

では、どうやって「吃音」についての自己物語を作っていくのか。

その方法の一つとして、「当事者研究」がありません。

## (5) 当事者研究

### <べてるの家>

当事者研究という言葉は、もともとは北海道浦河町の社会福祉法人「べてるの家」での活動から始まりました。べてるの家では、統合失調症などの精神障害を持つ人自身が、自分自身について研究を行っています。それを「当事者研究」と呼んでいます。

精神障害、特に統合失調症という病気は、「治った」とはなかなか言えない病気です。もう大丈夫だと思って薬を止めると再発する。周囲と色々な問題を起こし、再発を繰り返すうちに、だんだん自尊心は下がっていきます。

私は、彼らもまた「精神障害」という異文化にはまり込んだ人たちなのではないかと思っています。自分がどういう状況なのか、言い表す適切な言葉が見つかりません。医療の専門家は、それについて病名をつけ、治療方針などを決めていくわけですが、病気になった本人（当事者）は、そういう専門家のご託宣を受け入れるだけの存在になっています。患者になってしまった人は、自分の状況を自分の言葉で語ることは普通できません。

べてるの家の活動で画期的だったのは、自分で「自己病名」をつけて、自分で症状や問題の意味を考えようとしたことで、それが当事者研究だったわけです。

### <当事者研究の方法>

具体的な方法はいろいろあります。べてるの家の向谷地さんは、①一人当事者研究、②マンツーマンでの当事者研究、③グループで行う当事者研究、の3つを挙げています（向谷地、2009）。

べてるの家では、③のグループによる当事者研究がよく行われているようです。

「発達障害当事者研究」（綾屋・熊谷、2008）という非常に興味深い本がありますが、これはマンツーマン型です。発達障害当事者の綾屋さんが語り、脳性マヒを持つ小児科医である熊谷さんが一緒に言語化を行っています。

また、当事者研究という言葉は出てこないのですが、被差別部落出身であることの経験をまとめた村崎さん（猿回し師、「反省」猿で有名）が書いた「橋はかかる」（村崎・栗原、2010）もマンツーマン型の当事者研究であると考えられます。妻で、テレビのプロデューサーでもある栗原

さんが話を聞き取り、文章化をしています。

ところで、吃音の場合ですが、一人で吃音について考え、その意味を考えるのはかなり難しいことだと思います。だいたい一人で考え込むと、同じ場所から出発して同じ結論になる、ということがほとんどです。それでは日記やブログはどうでしょうか？ 日記は、自分自身を読者としている、という点で、一人で考え込むよりは良いかもしれません。また、公開しているブログだったら、コメントも付くだろうし、そこには他者の存在が色濃くあるということになります。

しかし、言葉を紡ぐという作業は、ある人が語り、それを聞いた人が質問をし、言葉のすりあわせをし、それで良いのか、もっと適切な言葉があるのではないか、ということを考える、集中的で濃密なプロセスを必要とします。その意味では、やはり一人よりは他者（聞き取ってくれる誰か）がいてくれた方がいいように思います。

私は、2人で行う当事者研究が好みです。その方法については、いくつか発表しています（高松、2011）。

### <ドミナントストーリーと

#### オルタナティブストーリー>

一人一人には独自のストーリーがあります。例えば「どもりのおかげで人に嫌われた」というようなものであり、これを「ドミナント（支配的な）・ストーリー」と呼びます。一人で考えていると、多分このドミナント・ストーリーが繰り返されて、強化されていきます。ところが、吃音について長く考えてきた先輩の話の聞いたり、あるいはセルフ・ヘルプグループに参加しているうちに、「どもりのおかげで人に出会えた」とか「人の気持ちが分かるようになった」など、別のストーリーが生まれてくる可能性があります。「どもりで良かった」などという人もいます。これを「オルタナティブ（代替的）・ストーリー」と呼んでいます。

一人で考えても、なかなか「ドミナント・ストーリー」から抜けられないのですが、同じ悩みを持つ人と話すと、意外な展開を見せる可能性が高くなります。

### <語ることの意味>

「辛い体験は、人には話したくないものだ」と世間の人は言いますが、実際は違うと思います。その経験が大変なものであればあるほど、誰かに話したいと強く願うことがあります。それはなぜなのでしょう？

異文化に突き落とされる、ということは、「周り

との絆を失う」という経験を伴います。だからこそ、その失われた絆をもう一度取り戻すために、人は他者に語ろうと試みるし、また当事者研究を試みます。

我々は、この世界の言語化されていない荒野に対して、一言でも言葉を当てはめていくことで、自分がこの世に生きたことを、あるいはこの世の中で何か意味のあることをしたということを示そうとしているのかもしれませんが。

失われた絆を回復する。人と人とがまた出会う。当事者研究が持つ最も重要な機能は、これなのではないかと思っています。

### <色覚マイノリティ>

私自身も、当事者研究を行い、学会に発表したことがあります(高松、2010)。私が抱えている問題は「色覚マイノリティ」という領域です。これは、普通は「色盲」とか「色弱」、あるいは「色覚異常」などと呼ばれているのですが、私にはこれらの言葉を受け入れることが出来ません。「盲」「弱」「異常」などの言葉は私にはしっくり来ないのです。だから、自分で「色覚マイノリティ」という言葉を作り、どういう問題があり、その経験を通して自分は何を学んだのかを研究してみました。

実際、30年以上この問題を考えてきたのですが、「当事者研究」という言葉に出会えたおかげで、ようやく少しこの異文化に目鼻が付いてきました。

今は変わりましたが、私が高校生の頃、社会において色覚マイノリティを持つ者は、あちこちで差別を受けていました。遺伝であるので、治ることは決してないのに、なぜか毎年毎年同じ検査を人前で受けさせられ、何のケアもされず、大学進学も医学部や理系には進めない事が多かった時代でした。時々、怪しげな団体が「色盲は治る」と称して、高額な訓練を行っていたりしました(今でもあります)。

当事者研究を始めてみて、私の中に、どれだけ強い怒りと悲しみがあつたのか、いろいろな人と話すなかで、少しずつわかってきました

「自己物語は聞き取ってくれる誰かに向かって語られなければならない」と前出の野口さんは書いています。当事者研究は、この聞き取ってくれる他者と共に意味を紡ぎ出す作業であり、失われた他者との絆を再び結ぶ作業でもあります。

### <誰に向けて語るのか？>

ところで、当事者研究について、私は少し違う視点を持っています。語る相手によって、ストー

リーの量も質も変化すると考えています。つまり、1つの「語り」が完結するためには、a)当事者同士での語り、b)当事者以外の人との語り、c)多くの見知らぬ人への語り、という3つのステップが必要なのではないかと思っています。

自分一人で考えた内容は他者には伝わりにくいものです。うまく言葉にできない焦り、経験を思い出すことによって蘇る怒り、勝手な思い込み、被害感に彩られた言葉に、聞いた人は途惑うことになります。伝えようと思うのであれば、未分化な気持ちに言葉を与え、同時に、相手にわかるような言葉にして差し出す必要があります。

その最初の作業が a)の当事者同士の語りの中で行われます。自分一人で考えていても、自分の経験や気持ちに対して適切な言葉はなかなか浮かんでこないものです。しかし、同じ問題を長く考えている人々と一緒に語れば、「それはこういうことじゃない？」とヒントがもらえます。

続いて、b)の当事者以外の人に語るというプロセスがあります。問題を共有しない人に語ることで、当事者同士だと当然だと思われていた内容でも、論理に飛躍があつたり、一般社会と共有できていない部分などが見つかってきます。

最後に、c)の多くの見知らぬ人への語りですが、これは当事者が様々な場所に出かけて行って、講演をしたり、意見を発表したり、という語りを目指します。私は、「セルフヘルプ・セミナー」などの公開の場で、自分自身の個人的体験を語る人を見る度に、なぜこの人たちは、話すのも辛い経験を、大勢の、もしかしたら全然理解してくれないかもしれない人たちの前で語るのか、不思議に思っていた時期がありました。

なぜ見知らぬ人たちに話すのでしょうか？

異文化に突き落とされる、ということは、「周りとの絆を失う」という経験です。だからこそ、その失われた絆をもう一度取り戻すことが、当事者研究の主たる目的なのではないでしょうか。あるいは、この世界の、言語化されていない荒野に対して、一言でも言葉を当てはめていくことで、自分がこの世に生きたことを、あるいはこの世の中で何か意味のあることをした、ということを示そうとしているように思われます。

失われた絆を回復する。人と人とがまた出会う。当事者研究が持つ最も重要な機能は、これなのではないかと思っています。

### <2人で行う当事者研究——ペアフォーム>

では、実際にどのように当事者研究は展開され

るのでしょうか。

私は、主に2人での当事者研究、「ペア・フォーム」を考え、実践しています。

手順は以下の通りです。

a) 出来事を選ぶ（研究タイトルを決める）

自分にとって大事な問題だけど、これまであまり話してこなかったことが適当だと思います。問題とか困ったこととは限りません。楽しかったけれど、一体あれは何だったんだ？というような出来事でも構いません。

b) リサーチ・パートナーを選ぶ

自分にとって話しやすい人を選びます。同じ問題を共有する、少し先輩、というような方がベストです。あるいは、問題を共有していなくても、理解力があり、ゆっくり話を聞いてくれる人を選びます。

c) 話してみる

最初はうまく言葉にならないと思います。研究タイトルの周りをぐるぐる回る感じでも構いません。

リサーチ・パートナーは、話を聞きながら、時間的順番がどうなっているのか、ストーリーに何かちぐはぐなところはないか、などを考えながら聞きます。質問もします。カウンセリングでは「気持ちや聞き手」ということに焦点が当たりますが、当事者研究ではストーリーの流れが重要です。「こうなって、こうなったから、こうなった」みたいな感じで聞いていきます。

d) ディスカッション

「今回、話してみてどうだったのか」を語り合います。この段階でオルタナティブストーリーが現れてくることもあります。この出来事は、当事者研究者の人生にとって、どういう意味があったのかを考えます。

e) その後

同じリサーチ・パートナーとセッションが続く場合もあるでしょうし、別の人とセッションをしていくことも可能です。また、文章にまとめてみることをお勧めしています。書いてみると、改めてその出来事の意味とストーリーの流れを感じることが出来ます。

### <リサーチ・パートナーの役割>

リサーチ・パートナーは、共同作業を行う人です。当事者研究をした結果出てきたストーリーは、2人の共同作品となります。こんなイメージです。カウンセリングでは、あくまでクライアントが中心であり、作品(気づきや成長)はクライアントの中に生まれます。しかし、当事者研究においては、

作品は2人の間、二人が向かい合っている真ん中に現れてきます。

カウンセリングのように、感情に焦点を当てることはあまりしません。大事なものは、物語の時系列と、それをどういう言葉で、どう表現するか、という点です。

当事者研究を行う者が、言葉にならない時にそれを一緒に考えたり、わかりにくい言い回しを別のものに言い換えたり、物語の破綻やつながりの悪さを補っていきます。

### (6) おわりに

以上、私の専門である「異文化」をからめて、吃音を語る意味を考えてきました。

「言葉は誰かに向かって話されなければならない」。私はそのことに可能性を感じています。お互いに理解し、お互いに支え合うような関係は、あちこちでできはじめているように思います。

「どんな経験にも意味がある」というような表現を時々目にしますが、それは間違っていると思います。「どんな経験からでも人は意味を見いだせる」と表現すべきでしょう。だけどそれは一人ではできない。そして、「一人ではできない」ということは何だか素敵なことだと思いませんか？

### <引用文献>

- 綾屋紗月・熊谷晋一郎 2008 『発達障害当事者研究』 医学書院
- 伊藤伸二・吃音を生きる子どもに同行する教師の会（編）2010 『親、教師、言語聴覚士が使える吃音ワークブック』 解放出版社
- 小林宏明 2009 『学齢期吃音の指導・支援』 学苑社
- 向谷地生良 2009 『統合失調症を持つ人への援助論』 金剛出版
- 村崎太郎・栗原美和子 2010 『橋はかかる』 ポプラ社
- 野口裕二 2002 『物語としてのケア』 医学書院
- 高松里 2004 『セルフヘルプ・グループとサポート・グループ実施ガイド』 金剛出版
- 高松里 2009 『サポート・グループの実践と展開』 金剛出版
- 高松里 2010 「色覚マイノリティ」についての当事者研究 日本人間性心理学会第29回大会発表論文集、104-105
- 高松里 ワークショップ「自分らしい臨床を行うための『当事者研究』入門」配布資料 日本人間性心理学会第30回大会

